

令和2年度 奈良市立済美幼稚園 研究実践概要

園長名 福田 芳高

全園児数 30名

1. 研究主題

「なかまと楽しく遊び、心豊かにたくましく生きる幼児の育成」

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

新型コロナウイルスの新しい生活様式を取り入れながらも、園生活で子どもたちが、思う存分、保育者や友達と一緒にしたいことを実現できる環境、保育設定をしながら子ども自らが主体的に取り組もうとする子どもの育成を目指して本主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

いろいろなひとやものとかかわり、ふれ合いながら、様々な体験や経験を積み重ねる中で、子ども自らが主体的に活動しようとする力を育てる。

②研究の重点

- ・研究主題について共通経験を図り、具体的な取り組みの方法や保育内容を検討する。
- ・生活や遊びの中で、直接的・具体的な体験や経験を通して、人とかかわる力や思考力、感性や表現する力を育み、生きぬく力の基礎を培う。
- ・遊びの中で十分に体を動かし、たくましい心と体をはぐくみ、自らやりたいと取り組もうとするような保育と環境の工夫をする。
- ・家庭・地域・小学校・保育園との連携を深め、さまざまな環境や人とかかわりを通して、多様な経験ができるように計画し、保育の充実を図る。

③活動の方法

<事例1> 『電車ごっこしよう』 4歳児 11月

遠足で京都鉄道博物館へ行き、電車を見たり、乗ったりしたことをきっかけに、電車ごっこの遊びが始まった。段ボールの切れ端などにマジックで線路をかき、線路をつなげていく。初めはその上を歩いて「シュッシュ」「ガタンゴトン」「ポッポー」と、電車の音を口にしながら友達と一緒に楽しむ様子が見られた。

遊んでいくうちに「もっと長い線路にしよう」「駅を作ろう」「看板も立てよう」「電車に乗りたい」使い電車を作って2、3人で乗りあってみたり、積み木やトンネルを持ってきて駅を作ったり、線路をたくさん作り、ルートを変えて遊ん



でみたりしていた。楽しそうな雰囲気とその様子を見ていた周囲の友達も「ぼくもいれて」と参加し、友達同士で「次はどんなコースにしよう」「踏切もつくろう」と、思いを出し合いながら考えたり遊びに必要なものを考えて作ったりとどんどん遊びを展開して楽しむ姿があった。



【反省・評価】

遊びを考えたり試したりしている中で、同じ思いをもっている友達と力を合わせたり、思いを出し合ったり、遊びに必要なものを自ら作り使って楽しむ姿につながった。子どもたちが遠足で経験したり、見たものを今回の遊びの中で取り入れている姿があり、子どもたちのひとつひとつの経験の積み重ねや共通体験が、遊びを発展させたり、子どもたちが主体的にやる気をもって物事に取り組む姿につながると改めて感じた。

<事例2> 『これは違う音、、、ほらね』 4歳児 12月

園庭の奥にドングリの木がありドングリがたくさん落ちていた。「これは大きいからお父さんドングリ」「これは赤ちゃんドングリかな」とドングリの大きさを見ながら友達同士で話し大きなタライにドングリをたくさん集めていた。

雨の日、保育室に直径1m程の丸い囲いをし、その中にドングリをたくさん入れ、ドングリプールをつくった。頭からドングリをかぶったり、トイに傾斜をつけドングリを転がしたり、お皿やカンの入れ物にドングリを入れたり、思い思いの遊び方でドングリと関わっていた。箱に筒をいれその筒にドングリをいれてみると、「ポンッ!」といい音が鳴った。何度も同じことを繰り返していくうちに、大きいドングリと小さいドングリで音が違うことに気付く。「これ(ドングリ)はこんな音、やのにこれ(ドングリ)は違う音、、、ほらね」と保育者や友達に試しながら知らせていた。それを聞いた友達も同じことを試す。「ほんとや、すごい!」「大発見やん。」と、顔を見合わせながら嬉しそうに話す姿があった。

【反省・評価】

自然豊かな園庭で、森やビオトープがあり、日頃から草花や木の実、生き物などと関わることができる環境があるため、自然に触れ、気付いたことや感じたことを友達や保育者に知らせている姿が多くみられる。そんな中で身近なドングリに触れ、ドングリの大きさ、形の違いや音の違いなどを発見し、それを何度も試したり、それを友達と共有し、友達の発見を聞き、実際に試したりしながら気付いた喜びを嬉しそうに一緒に共有する姿がみられた。

<事例3> 『すぐ終わっちゃう…』 5歳児 12月

サッカー遊びや転がし中当てなどを通してボール遊びに親しみ、よく取り組んでいた。小学校との交流の際、小学生がドッジボールをしているのを見て「やってみよう!」とドッジボール遊びを始めた。同じ思いの友達が声を掛け合い、チームを決め、ルールを決めたり、確認し合ったりしながらドッジボール遊びを始める。しかし、自分のチームがいつも負けてしまったり、人数が少なくあつという間におわってしまったりして、ゲームが続かない



ことがあり、「人数が少ないからすぐ終わっちゃう」などの困り感が出てきた。保育者が仲介する中で、互いに「チームは得意な子同士でグッパするとかどうかな」「元から外野だった人も当てたら中に戻れるようにしたら中の人が多くなる」など、自分なりに思いついた方法を出し合い、再び挑戦する。すると、チームのバランスも取れ、いつもより長くゲームを楽しめた様子がある。「そらぐみみんなでしたい」という思いも出て、みんなに積極的に声をかけ、クラス全体でも繰り返しドッジボールを楽しむ姿につながっている。



【反省・評価】

「ドッジボールをしたい」という同じ思いを持った幼児が集まって遊びを始めたが、「このやり方では楽しくない」という思いを感じる子も出て来た。その中で、ドッジボールをしたいという同じ思いを持った友達同士で互いに考えを出し合い、みんなが楽しんで遊べる方法を考えて遊びを進めるきっかけになった。また、自分たちが楽しいと思うことをクラス全体にも誘い掛け、みんなでドッジボール遊びができたことで、自信をもって遊び方やルールを友達に知らせたり、楽しさや活気も上がり、その後のドッジボール遊びの継続にもつながっている。

<事例4>『どんぐりドーナツ屋さん開店します』5歳児 10月

弁当後の保育室での遊びの中で、「先生！お店屋さんがしたいねん」と数名の子が伝えにきてお店屋遊びを始める。その様子を見ていた周りの幼児も「私もしたい」と集まってくる、遊びを進めていく中で、「(前は)アイス屋さんしたけど、もう寒いよね」「ドーナツ屋さんはどうかな」「いいね。私はチョコドーナツ作る」「何で作る？」「トッピングにドングルつけよう」と必要な材料を考えたり、どんなお店にしようかアイデアを出し合ったりして遊びを進める。ドーナツがたくさんできてくると、「お店の看板つくる」「私はメニュー作るね」と日に日にイメージが広がり、遊びを続けていた。そして天気の良い日は園庭で「どんぐりドーナツ屋さん開店しますよ」「いらっしゃいませ～」と呼びかけ、4歳児が来てくれると嬉しそうに案内している姿があった。



【反省・評価】

子どもたちの「お店屋さんがしたい！ドーナツ屋さんがいい！」という思いから、必要な素材や材料と一緒に考え、用意したことで、子どもたちが楽しみながら繰り返し遊ぶ姿につながった。また、今までの経験の積み重ねもあり、友達同士で何が必要か話し合ったり、自然と役割分担したりして遊びを進める姿があった。戸外にお店を出したことで、異年齢での交流にもつながり、友達とのやり取りも増え、思いの合う友達同士で、互いに考えやアイデアを出し合いながら遊びを進める楽しさを感じていた。



5. 研究の成果

保育者や友達と一緒にたくさんの経験をし、感じたことを言葉にしたり、形にして試したり楽しむ姿がみられた。また遊びを進めていく中でもっとこうしてみたいと思いが芽生え、

友達や保育者と工夫し、子ども自らが意欲的に遊びに取り組む姿につながった。

6. 今後の課題

今後も新型コロナウイルス感染症の対策をしっかりと行いながら、遊びの充実を図り、可能な範囲で家庭や地域、保幼小中等、多くの人と触れ合い、子どもの心に残る体験を積み重ね、心身ともに健やかな子どもの育成を目指し、保育内容の創意工夫に努めていきたい。